

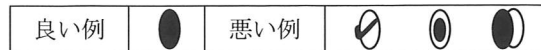
2021 年度入学試験問題

一般 (前期)

国 語

1. 問題冊子は試験開始の合図があるまで開かないで下さい。
2. 問題は全部で9 ページです。脱落のあった場合はただちに申し出て下さい。
3. 解答は、すべてマークシート用紙の指定された箇所に鉛筆でしっかり濃く記入して下さい。

マーク例



4. 無マークまたは複数マークの場合は0点となります。
5. 間違っただけの場合は消しゴムできれいに消して下さい。
6. マークシート用紙には、氏名と「番号欄」には0から始まる4桁の受験番号を右詰めで記入、「番号マーク欄」には受験番号をマークして下さい。年月日、学年、クラスには何も記入しないで下さい。

氏名	
----	--

例) 受験番号が「0123」の場合

学年	クラス	番 号			
		0	1	2	3
0	0	0	0	0	0
1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4
5	5	5	5	5	5

大阪警察病院看護専門学校

一、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

① ヴィクトール・E・フランクルは、アウシュヴィッツ強制収容所に収容されていたときの自分の身体について、こう振り返っている。「皮下脂肪の最後の残りまで費やされてしまうと、われわれは皮膚とその上にいくらかボロを纏った骸骨のように見えるのであった。そしてその時われわれは如何に身体が自分自身を貪り始めたかを見うるのであった、すなわち有機体に自らの蛋白質を食いつくし筋肉組織が消えて行くのである」(『夜と霧』霜山徳爾訳)。フランクルはつづけて、自分の身体が自分のものではなく、ただの肉のように感じたとも語っている。

② ダッハウ、アウシュヴィッツ、ザクセンハウゼン、ノイエンガメ、トレブリンカなど、どこかのナチスの強制収容所にも厨房と食堂があった。囚人たちは、法的な保護の外に置かれていた。それでもナチスは、彼らや彼女らから台所まで奪いはしなかった。罰として食事が抜かれることがあっても、許されれば食事が与えられた。囚人たちは、それでもまだ「労働力」だったからだ。戦争の遂行とともにドイツ人労働力が圧倒的に不足するなかで、強制収容所に工場を併設したのは、一部企業化していた親衛隊だけではない。IGファルベン、クルップ、ジーメンスなどの大企業が、人間の基本的な権利を奪われたアウシュヴィッツの囚人たちを、コストの極めて安い労働力として利用したのである。

③ ようするに、『夜と霧』を再読して気づいたことは、企業の労働力として考えたときの囚人のコストの安さの秘密は、自分自身を食べることにあつた、という単純な事実である。毎日収容所から配給される食べものだけでは生命を維持できない囚人たちは、フランクルのいうように、ひとかけらのパンを食べつくしたあと、ついには自分たちを食べはじめた。自分たちの肉体に残っている脂質を、そして筋肉組織を、貪りはじめたのである。刃物も火も必要としない、究極的な 甲 といえよう。

④ 収容所の台所から、ほとんどまともな食べものが出てこない以上、囚人たちは、自分たちの身体のなかに、刃物も火も必要ないもつとも効率のよい、もつともコンパクトな台所を建設する。台所で あ セイアツするのは、動植物ではなく、自分自身である。このような状況に対する一種のとまどいを、フランクルは的確に「人間の肉でしかない」と表現したのだ。

⑤ とところで、もうひとつ、近代のキッチンの「究極の姿」を紹介しよう。主婦は A になるべきだ、という第二次世界大戦下ドイツのレシピ集『料理をしよう!』での表現である。台所のなかに人間が埋め込まれる、というものだ。非戦闘員も容赦なく戦争に巻き込む総力戦のなかで、主婦に要請されたのは、機械のように寸分の間違いもなく、ありとあらゆる無駄を排除し、台所仕事をこなすことであつた。

⑥ 「人間のなかに台所を埋め込むこと」と「台所のなかに人間を埋め込むこと」——それぞれ台所の合理化を強制させられた囚人と主婦は、なるほどたしかに、まったく次元の異なる存在である。しかしながら、わたしは、この両者のあり方に、近現代人が求めてきた食の機能主義の究極的な姿を認

めざるをえない。1、人間ではなくシステムを優先し、どちらも、「食べること」という人類の基本的な文化行為をかぎりなく「栄養摂取」に近づけているのだ。

7 いうまでもなく、このような近代キッチンの五里(い)ムチュウ状態、「食べること」の凋衰(たふさ)は、現在の日本社会でも日常的に見ることができ。2、食べる時間を削って仕事に充ててきた日本の猛烈サラリーマンたちの行き着いた先が、「瞬間チャージ」が謳われる栄養機能食品であったことは、無数のドラッグストアやコンビニエンスストアが証言してくれるだろう。

8 では、どうして、「食べること」はここまで衰微してしまったのだろうか。どうして、強制収容所というわたしたちの生活世界からもっとも遠いところの現象が、こんなにもリアルに感じられるのだろうか。

9 これは、端的に言ってしまうえば、この世界が、ナチズムと陸続きだからである。「餓死」や「孤独死」はそれほど珍しいことではない。二十四時間営業のコンビニや居酒屋の「雇われ店長」、あるいは慢性的に労働力が不足する看護師に、彼らの執行部が求める仕事の量と質は、場合によっては、人間の生命維持活動に支障を来すほどである。

10 ただ、この日本でさえ恵まれている、といわざるをえない現実もある。いま、地球は、飢餓人口を十億人近く抱えていると推定されている。飢える人びとは、難民や政治犯や失業者というかたちで社会から排除させられたために、やむをえず、Bをみずからの身体に埋め込まねばならない。難民キャンプやシェルターにたどり着けなければ、彼らや彼女らは、最終的にはみずからを食べはじめ、痩せ衰えていく。この現在の状況と、フランクルの証言から垣間見える強制収容所の状況は、どれほど異なるだろうか。

11 では、どうして、このようなことになったのか。それは、いま、地球上を覆う資本主義というシステムの問題に尽きる。資本主義が、一本の長い槍のような右肩上がりの発展という物語を紡いだのは、その土台に持続的な循環システムがあったからである。たしかに、資本主義も循環をもつ。お金と景気が循環して成り立っている。だが、それは真の循環ではない。これはただ、つるつると世界を回っているだけである。真の循環システムが、絶え間なく、労働力とCという絶対に工場で作ることのできないものを市場に供給し、生物の死骸を土に戻すからこそ、猛烈サラリーマンは猛烈たりえたのだ。

12 たとえば、土壌という暗闇の世界では無数の小動物、昆虫、バクテリアが活動しているが、その分解作用によって、有機物は無機物になり、植物に吸い上げられて、その植物は動物や人間に食べられる。大気や水が循環することで、工場の排出した煙や廃棄物は拡散し、人間社会には絶え間なく淡水が供給される。森林は、二酸化炭素を吸って酸素を吐き出しながら光合成を行なう。

13 これと同じように家庭もまた、社会の循環システムを担っていた。労働力は、毎日、天から降ってきたり、土の中から湧いてきたりするわけではない。疲れ果てた夫や子どもや自分の肉体と精神を明日の出勤・通学時刻までに回復させ、老化しショウ(う)モウし続ける夫や自分に代わる次世代の労働力を、みずからの子宮とベビーカーで育て上げる無限の愛の空間―つまり「家庭」がなければ、資本主義は成り立たないのである。

14 さらに、底辺社会もまた循環システムにほかならなかった。3、明治時代の作家・ジャーナリストとして知られる松原岩五郎が『最暗黒之

東京』(一八九三)のなかで活写した、残飯屋の光景に体现されている。ここでは、士官学校の給食や歓楽街の料理の残りものを、残飯屋がスラムに運び、安い値段で売る。これによって、本来はゴミになるはずの残飯が食事となり、低コストで慢性的に飢えている底辺の住人の明日のエネルギーに交換される。この底辺の住人は、日雇い労働者として、つまり、日本経済の最低賃金水準の労働力として、社会を支えることになる。底辺のギリギリの生命維持費用によってこそ、安価な賃金が生まれ、そのラインが、それよりも少しだけ賃金の高い労働者の賃金カットを正当化していく。

15 松原の著書のタイトルがいみじくも表現しているように、自前で循環する [D] は「最暗黒」と名指され、不可視化されてきた。そして、イヴァン・イリイチが家事労働をシャドウ・ワークと呼んだように、家庭もまた、市場の評価の外に置かれ、それゆえ、市場世界のアクターの視界から閉ざされてきた。たくましい想像力がなければ、自分の留守中の家のことや、地面の下の豊かな生態系を思い描くことは難しい。 [4]、その闇から、資本主義は容赦なく労働力と自然資源を吸い上げつづけてきたのだ。 [I] 当然ながら、循環世界は疲弊する。足尾鉍毒事件や水俣病などの「公害」と呼ばれる企業害から家庭内暴力に至るまで、疲弊現象は、さまざまな場面で噴出しているのである。

16 では、わたしたちは、どのようにして資本主義社会の「迷える子羊」である台所を救出し、再生できるのだろうか。

17 フランツ・カフカの「断食芸人」という作品は、台所を救出するためのヒントを与えてくれる。これは「飢え」を [E] として生計を立てる男を描いた短篇小説である。第一次世界大戦後の食糧欠乏のなか、旧ドイツ帝国や旧ハプスブルク帝国内の社会の底辺での飢餓がようやく落ち着き始めた一九二二年に、この小説が発表された歴史的な意味は、小さくないだろう。カフカは、断食芸人への関心が世間から失われていく様子を淡々と描いている。

18 しかし、この断食芸人が孤立していく過程は、逆にいえば、飢餓とは自分自身を料理し、食べることにある、という事実を近現代人が忘れていく過程と、奇妙に重なり合っている。毎日の食事に潜む美も、日々飢え死にする子どもたちをも (え) ボウキヤクの彼方に押し込むことで、ようやくこの世界は、愉快そうに、かつ楽しそうにみえる。 [5]、断食芸人は、死ぬ間際に、「いったいどうして他にしようがなかったのか」と尋ねた監督の耳元で、唇を尖らせながらこうささやいている。「自分の口にあう食べものを見つけられなかったからだよ。見つけていたら、こんな見世物なんてやらなかっただろうし、あんたや他のみんなと同じように、腹いっぱい食べていたことだろう」。断食芸人は、 [乙] を告発したあと、藁くずと一緒に廃棄されていくのである。

19 この救いような話話、しかし、ひとつの台所救出の鍵を暗示しているように思える。「料理をすること」と「食べること」は、それがたとえ毎日繰り返されるものであっても芸術と呼ぶに値する美的行為である、という事実である。断食芸人は、本当に自分にとって美味しいと思える食べものと出会ったとき、断食という芸を捨てただろう。ということは、「美味しい」という感覚を心から味わえなかったからこそ、飢え、つまり自分自身を食べることによって「美」を求めたのである。

20 これが意味するのは、これまで成長至上主義的な「直線世界」によって「闇」だの「影」だのと形容されてきた「循環世界」には、実は「直線世界」よりも充実した美や生が存在している、ということである。もちろん、残飯屋でしか生きていけないという生活は、あつてはならない。ひとつの

性だけが台所のなかに拘束されるといふことも、けっして良いことではない。飢えは、地球上から追放されなければならない。「最暗黒」は理想郷であつてはならないのだ。

[21] だが、もしも、これらの「循環世界」が、一家庭、一社会の外へと拡がって別の家庭や社会と結びつき、街頭に台所がゾウ(お)シヨクし、そこで過ごす時間を資本主義社会発展のために過ごす時間から奪還し、その台所からコミュニティが再生または誕生し、まったく新しい巨大な「最暗黒」循環世界」のネットワークを紡いでいったら、そのとき、「最暗黒」とそれを照らそうとする「光」は反転するだろう。みんなと一緒に作って、食べて、片づけることは、実に楽しく、美しい。その時間を惜しんで成長に邁進する社会こそが「最暗黒」であつたことに、^{II} 光の世界の住人たちは、そのとき初めて気づくはずである。

(藤原辰史 『『食へること』の救出に向けて―『ナチスのキッチン』あとがきにかえて』による)

注 シャドウ・ワーク：人間生活に必要な不可欠だが、家事労働のように賃金の支払いを受けない労働。

問一 二重傍線部(あ)～(お)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙にマークせよ。

解答番号は 1 ～ 5。

(あ) セイアツ

- ① セイギを貫いて生きる。
- ② 身体力のゼンセイ期を過ぎた選手。
- ③ 書類をセイリする。
- ④ セイフクに着替える。
- ⑤ セイリヨク的に支援する。

(い) ムチュウ

- ① 生活に困り、金をムシンする。
- ② ムゾウサな筆づかい。
- ③ キンムチュウに外出する。
- ④ 主義にムジュンする行い。
- ⑤ ノウムに注意して運転する。

(う) ショウモウ

- ① タイヤがマモウする。
- ② モウゼンと走り抜けていく。
- ③ モウソウに悩まされる。
- ④ タイモウを抱いて留学する。
- ⑤ 捜査のモウテンを突く。

(え) ボウキヤク

- ① ライキヤクに備える。
- ② 芝居のキヤクホンを手掛ける。
- ③ 公訴をキキヤクする。
- ④ キヤクリヨクを鍛える。
- ⑤ 自己とキヤクタイとの関係。

(お) ゾウシヨク

- ① シヨクブンをわきまえる。
- ② ヨウシヨクが衰える。
- ③ カンシヨクを確かめる。
- ④ 臓器をイシヨクする。
- ⑤ 魚をヨウシヨクする。

問二 空欄 [1] ～ [5] に入る適切な語を、次の①～⑥のうちからそれぞれ選べ。解答番号は [6] ～ [10] 。

- ① それはちょうど ② しかも ③ どちらも ④ そもそも ⑤ しかし ⑥ たとえば

問三 空欄 [A] ～ [E] に入る適切な語を、次の①～⑥のうちからそれぞれ選べ。解答番号は [11] ～ [15] 。

- ① 芸術 ② 台所 ③ 精神 ④ 機械 ⑤ 自然資源 ⑥ 底辺社会

問四 空欄 [甲] に入る適切な語を、次の①～⑤から選べ。解答番号は [16] 。

- ① 調理の最適化
② 台所の合理化
③ 食のシステム化
④ 暴力の自動化
⑤ 身体性の略奪

問五 空欄 [乙] に入る適切な語を、次の①～⑥のうちからそれぞれ選べ。解答番号は [17] 。

- ① 「食べる」と「食べないこと」の行為の美的価値
② 世の中の「食べる」という原始的行為への痛烈な皮肉
③ 世界の「食べる」と対しての倫理的な問題の再検討
④ 「食べないこと」に対する社会の固定的な価値観の転倒
⑤ 世界の「食べる」と「食べるもの」の美学的な劣化

問六 本文全体を大きく三つに分けるとすると、論旨の展開はどのようになるか。次の中から最も適当なものを次の①～⑤のうちから選べ。解答番号は18。

- ① 食の機械化 — 「食べること」の衰微の背景 — 台所の再生と救出
- ② 「食べること」の衰微 — 自然資源の循環システム — 最暗黒社会の循環システムの光
- ③ 循環世界の崩壊 — 台所の合理化 — シヤドウ・ワークと資本主義
- ④ 食の機能主義 — 底辺社会の循環システム — 美的行為としての「料理」
- ⑤ 台所の合理化と食の機能主義 — 食の循環システムの疲弊 — 新たな食の循環システムの再構築

問七 次の一文はどの段落の末尾に位置するか。適当な段落番号を次の①～⑤のうちから選び、記号で答えよ。解答番号は19。

自然のコストが安いのは、それが、人間が構築できないほど高度な循環システムを有しているからである。

- ① 6
- ② 8
- ③ 10
- ④ 12
- ⑤ 14

問八 傍線部Ⅰ「当然ながら、循環世界は疲弊する」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当な物を次の①～⑤から選べ。解答番号は 20。

- ① 資本主義の土台を支える自然資源の供給システムを破壊してしまえば、労働力を社会に供給する家庭という社会的単位をも喪うことになり、従来の資本主義の循環に悪影響を及ぼしかねないということ。
- ② 高度な循環システムを備えた自然資源も気候変動によって限界が近づき、さらに少子化による家庭の崩壊も拍車をかける現代社会では、もはや持続可能な循環システムなどあるはずがないということ。
- ③ 高度な循環システムを持つ自然から無尽蔵に資源を取り込み、さらに食を支える家庭から労働力を容赦なく吸い続けていけば、資本主義の持続的な循環が破綻することは目に見えているということ。
- ④ 過剰なほどに人的資源を搾取し、自然資源の枯渇に至れば、それまで自前で循環可能であった底辺社会においてもそのほころびが見え始め、悪循環に陥ることは予想できたはずのことだということ。
- ⑤ 自然の循環システム、市場の外に置かれるシャドウ・ワーク、自前で循環する底辺社会、これら三つの不可視のシステムの上で成り立つ資本主義社会は、その一つでも崩れれば共に崩壊するということ。

問九 傍線部Ⅱ「光の世界の住民たち」を別の表現に置き換えるとなると、どのような表現が適当か。最も適当な物を次の①～⑤から選べ。解答番号は 21。

- ① 底辺社会で飢えにおびえる人々
- ② 資本主義の恩恵に浴する人々
- ③ 食べることを美的行為と見なす人々
- ④ シャドウ・ワークに携わる人々
- ⑤ 成長至上主義を見直そうとする人々

問十 次の①～⑤について、本文の内容と合致するものを三つ選べ。解答番号は 22 ～ 24。

- ① 食に窮乏する底辺社会の循環のシステムが、一家庭、一社会の外へと拡がり、コミュニティの中で自由な食の時間を取り戻すことができるなら、未来に向けて持続可能な資本主義社会の可能性を見つけ出すことができる。
- ② カフカが描いた断食芸人は、「本当に美味しいと思える食べものとの出会ったとき、断食という芸を捨てただろう」と話し、我々に「食べること」が命をかけるほどの価値ある美的行為なのだということを訴えかけている。
- ③ 台所の合理化を強制させられた囚人と主婦は、人間ではなくシステムを優先し、どちらも、「食べること」という人類の基本的な文化行為をかぎりなく「栄養摂取」に近づけている点で、同じく食の機能主義の究極の姿といえる。
- ④ 食べる時間を削り、コンビニエンスストアで栄養機能食品を買う日本の猛烈サラリーマンたちの姿は、「食べること」という人類の基本的な文化行為から遠く離れ、ナチズムと陸続きにあると言っても過言ではない。
- ⑤ ゴミになるはずの残飯から循環的に食べものを生み出し、低コストで労働力を提供した底辺社会の循環システムが、近代社会を支える原動力となり得たという歴史的事実が、未来の食の再生へのヒントとなり得る。